



住心文集

中村俊定文庫
文庫 18
340
1





住吉文集

伊勢物語

むじろ〜男いつみね(1)いさりの住吉乃郡

す〜〜若里墨吉の演なりよひ也如ふり也

そのおは〜由くあし人住〜住演とも先とゆふ

居啼〜業の記〜結〜河〜其の海(子住吉の演

下略

甲斐の〜山梨乃郡山ふ〜若里〜

〜み吉住由神と〜川〜き〜向つりて



崇教多て戸は、秋社迄く清くは秋を
誦して法樂一程をのく、俳諧の脇
よみ起し一巻紙興好し一巻紙
西條留

家元を崇久し一巻紙のぬほ言
きし能くは松代御殿さん

あゝ露冬夕部の中しは瓦電	新と時賦、他を秋ありき	物何し是二階乃縁の月おかけ	石の袖中をこたふ、おゆりまゝ	と心と落る、壺いりの書	を侍か、かしこ海りおる	ハ重露も若し腰し味、晴なりと	むかしの秋、霜のりよあ書
杜五	抵張	糠丸	山町	艸長	黒露	久住	塙信

志佛くくくくくくくくくく
 前くくくくくくくくくくくく
 ほくくくくくくくくくくくく
 煽くくくくくくくくくくくく
 拂くくくくくくくくくくくく
 雨徳くくくくくくくくくくく
 さくくくくくくくくくくくく
 笠くくくくくくくくくくくく

其徳
 泉希
 守芳
 筑戸
 興平
 雨月
 韻竹
 二橋

二
 志念地くくくくくくくくく
 妹異地くくくくくくくくく
 赤くくくくくくくくくくく
 骨くくくくくくくくくくく
 浦くくくくくくくくくくく
 けくくくくくくくくくくく
 あくくくくくくくくくくく
 松風くくくくくくくくくくく

雲里
 貝川
 魚髪
 渭音
 魚道
 自来
 札筆
 伍竹

海へ百日らぬとぬらぬ用帳

孤竜

朝の出る名物の定もはやりと

黒露

少房とわよしくはうて種目

糠丸

源川を折れ終る様を味方園

抵張

園扇と麻とをま柏の木

くちう

組板へ昭鏡を落してつとせ

其徳

地まある面のきまき梯

泉布

今置る鏡の失せ給かんが屑

たき紙

屋敷の内へ若寺乃未入

箱戸

天婦羅のきき青くと朝の月

山町

を海こしは紫も房の来う風

艸長

海んとを房さへしけ出浪の杵

守芳

お城へ紫家と若し山伏

二橋

かつらと待思と江戸のが海門のい

興平

鯉の相も登るは若子湊

自来

いつ世間を四子尺雪の輝し海り

韵竹

二

二

ちやう思醫者の茶新りら
 八條、何ものなりて又九條
 鴨居よりうきつらぬ、如月
 六月の風より口城の如き
 善茶碗より知尚と取巻け
 向ふ言ふい降子城切りて
 向ふ走りよき、醬調
 書生を誘ふる花の車崎
 其徳

溜音

雲里

雨月

艸長

久住

真道

貝川

其徳

三

日の水紀事少年の如
 若く始夢ハくら望の廊り危
 むとの家来を猪早を於
 園崎を弾てるる、如拂琵琶
 舟より二とと、園の新道
 角大吹瓶乃傍より、如塔
 池菴のやうに、如解籠
 関川是いつと、機廻のよ川流

伍竹

糠丸

杜丘

鳩子

守芳

自来

抵張

孤竜

菅の中城はさき長野入
 菅竹
 さげ帯はあつた中世のまじり
 渭音
 切り名はうたかた乃経
 泉布
 石燃着一の残る十の敵
 杜丘
 和物の子を基とて雨
 山町
 枯の葉は雨のそよ風の来り
 興平
 松乃針はあつた一匹敵帳
 二橋
 三つ
 針の馬路町と云ふ川屋
 筑戸

多量の使物に於ては
 長信
 光りかゝる大空柄と閑り
 雨月
 扇柄をよみはるお説
 艸長
 向ひは名を時雨きりて止まん
 山町
 頼まりとては筋のふくま
 雲里
 麻唱のハ誰か向いぬ妹字下り
 糠雨
 来る気くは夏の招はけ
 渭音
 駐賢ハお出でうらうら二三日
 黒露

上

雲宵より翫く足分中制
 如鳩入の河原水さやう口拭く
 明神の浦の華水裏川
 南京の弦搦る橋原
 日二山の端より河川と出る月
 高陸より東川原段若を引くも
 片色け能袖を拂ふ唯子
 なんふんの案ハ秋をせよもの物
 貝川 興平 二橋 杜丘 岡如 抵張 久住 自来

半、乃ちりゝゝ系砂あつり
 祐天の若尻を斬り一親にあり
 榮田畑のほろくと關
 福流能白の橋木を赤い杉
 心おふへり雪の飛石
 何とび貝おとす者 炭俵
 蒲巻とまんが普く一日
 練教首婦一寺院も惣源一
 雨月 鳩信 山町 雲里 魚道 真髪 孤童 守芳

湯づきのやうな産物らし

伍竹

青園より木杵十圍よと月園

泉布

きつり少舟と世出ぬ門

其徳

^{あう}わだつみふ庭子の茶丸の台心

溜音

目とほつちりまにかつと再りた

思丸

素也屋の廊よ古靴の佛立て

韻竹

赤小瓶旅は夜宿乃ゆた

自来

きつりとつり上る馬の罌丸

艸長

思ぐまのひらきとておととひ

久住

任りし松の冠海より雲の富士

黒露

春の詠也甲斐は明かの

筠戸

右

二十五吟

闇如 <small>一句</small>	泉布 <small>四</small>	渭音 <small>五</small>
自来 <small>五</small>	守芳	魚道 <small>三</small>
久住	筠戸	孤龍
鳩信	興平	伍竹 <small>三</small>
山町	雨月	黒露 <small>四</small>
艸長	韻竹	
糠丸	二橋	
抵張 <small>三</small>	雲里	
杜丘 <small>五</small>	貝川 <small>三</small>	
其德 <small>四</small>	魚髮 <small>二</small>	

神代器

雪平堂自来

高しち初ら且も冬うち曇り如古器抄
 かね志多の葉より深き経とゆは云よ
 里下賜、家とも子代と後不なる居蘊
 の酒下を月出たれや、ききくはの二日お海
 切りくさへき経裏く大小と書るも、
 赤下よ飯か、く付是あり也家女の、かりき
 とりし、ちり指ぬの幽く文て山崎名の橋
 かくと、優し、やきし、はき、柄く、風爐如、

華

其藏觀泉布

晴雨のふらふら——とほふた雨のふらふら
 四葉の小楊をさ——と渡らさみ多しの乾思
 志いくもいつた夕立のふらふらとあつた
 破らんとはなれり雷のこがくとちり落し
 志と——少くはせし——より積雨の秋燈をや
 親へ——池の目もみちが華世の雪重し
 何れ知尚か——なつたあまの寺の庭——も破
 海七天地を渡——と東流とて冠者り華を

さなけり春日山と遠くも目出多し
 天下の海を渡る——と名づる海も

あつた

秋の華をとりて

桔槔辞

上石田 嵐光亭翁戸

一も少くはせし井の管川をりとしはと志
 つらり片々に石城をり付る中子もおせ
 秋立を荷つらと油——とらと臺の舞ふと

上
流と云物は似きりかき
井底中のあは波越えり
器と出たりや桔槔成り要助カ兵とや波
のあてをたつとと竿を中堂の管とて飯
粥より曉りて水の音取初しと祭
日と新しとあは雪中と下男の片手
とさる罪ありと縁漁し丸き釣網の下女の
あかみは寐起の顔を転ふきとらと和
せん桐の葉見けし自影とほりしと盛才

一の風流ふれ井筒のふりまはらるるお子
あは見えかりしけりしと唯まゝとあり
音の寂しきに極上とらと徳とあは
小梅つらみぬらるる浪種夢しとのあ
はらひきとらとあんととら田家の調法と
いの極上とあはらとたきと天地の一物
造物者の無盡蔵あり極し
その川く流る鏡世やと釣瓶
朝魚やめはかりに桔槔

小ぬるー記 環湖亭伍竹

風呂の上り場さ中々小袖取りー重子後
 びーとく布中々結ぶの紙ー紙重初ーより
 物り志気とりふかーかさ茶ー出さく今娘の
 用と紙ーかくと叶ぬ讀法あり其品書物者
不化の懐
本屋の眷 合相 包ー是茶履とりり子
 提多程さく山海黄紫チリメンの伊達を
 おく結ぶ茶と紙の深分ふあみねりさくも涼ー
 重箱さくり箱茶をさく又送、箱さ履ふたりー

毎下にああさくーハ餅つきのおさし人さ貸さ
 帰る怒り茶のどく丸玉用百歩さくも重ド
 さくさく西川の負いさく出黄もめんの手洗さ
 せさくさー記

歳ーつき深さく肩結小ぬるー記

瓢問答 律賀齊興平

かに僧らり其住とく海い木津雜波色
 子表さ味の戸のつきさくさかたり安立

町若妻より唯酒を好む日く一
銭を費し一市上りの海い麻
し心の中なり影いさきり樂し
少に大福の親にありうたを悪
僧と思ひて甘き殺生を食し先
羅の味は許由も又もくは娘
若洲より雨りと富家の交を
つし知れぬく世の費と云は
せん善くもかんて家財を
も

祖母は夕影の宿に留て源氏如君の
中何れもやまをり孫子と別
山里或は増殖へと本と勇
たりては尚東堂の袖に入
名のとが松竹岩斗の用
也兄も顔子に陋巷に秘蔵
何れは神虎の米へありて
相抱志とかの米へ籠の通
おきし室中梅の薫りく

幽々たる山に——花を落し集入るるに
 冬床子掛り上品乃ま、あつたるも也吾子千金
 の重方有らんや賀賀、何ぞうんや——いひ
 駒と出さしゆゆとほとほと富るる——いひ
 近り獲る竹や籠と押——是酔中の戯れ也
 ところ——盃若粗茶と入る釣者人の掉
 年かき事これ暇水の興と添るなりす也
 酒へ富重さや舟のまゆら魚

栗乃辞

乙黒里

芳潤亭雨聲

後園——一樹何り松もあつた柏もつた吉野
 上野へ茶をい圓安井龜井戸の菰たつた
 古知る寸卯あつた川原にや——と茶茶
 出——花散里と尋る寸曾、時々の詞に
 何と不咲初きとさ——あはむとさのく
 ——起を笑き——り五月雨の田軟り花
 落り時を墜栗花も散ゆけと憐人
 不——琴子此三弦を打たるる也其意は

上巻

北の角とて人柱人中船しんを打基をさ
川を西方子橋有とて杖子携りし祖翁
を兄つけ給ふと吹寄ぬ家ハ六月廿
号サ子秀て婦月の夜ハ子鞠の如く船づき
や船かゝ船の大敵と訪ふ也十方一周の
くると味と大整のことくなる思返し一船く
殊州く多く戸さき字昔てくお魚と味及
曾子も車やかかきんんつゝ思城の中間
をと龍も不孝の志が皮を引ひきを成理の

道も荊棘のさりり船しんかつしん
隠士ゆきも見し鬼す世路のりり船と一
句紙船ききりりや里芋とて豆も実
少く貴人け前うき石也茶や船風
かゝる是、かち標と意し蓬萊の目出ん記
教了し思又おらると味とハ小判也船を
あきむき献上能知ん貴とふなりぬれ世
くくりてと専し小児の好むと及かきり性
利ふしと味したる麻子さりり守醫味色

やあきまの酒さうふ赤白の折るわたりと
危あ杖しりまうりふうけの妻守りあめり
と海より雀鳥やうの鳥取道不返とつと先
とく無言志うも世能信地深く葉山子
能あまよしきりも秋をくごきう本後
かむ村やう鳥木とくかよと云たこの名も
とく霜雪子消く安きかこおあうりくと
境奥地——自うかり懸き志かまよるき
世人の教戒ともあまを知らず下う何き

歌——うかよき初風の源——おにまかこ
あけて田つうよえうとふとあねと折よ
あまのまの望の御お授り全りう月歌のう
うあ光を衆とくあせん突き中後の彼六万
餘年の巾乃一大物者じりり山田吉原是
何しの僧都やあ若うききう寸志やう
あにあふい弓押りりはく立上りり中
あに武者少りとあまのうらま果に松侯の
小平六五源田（か）うまはるるれ——

秋もゆきとふ人も何りやあしや
かゝるに思ふ兼て

讀み部

獨樂巾之記

明太齋鳩信

既中老寒を凌ぐ若御法あり不物ふとの
主乃既かゝのゆき類い有とも思ひ是す神代
賦と書ゆゆりや貴と形く賦をいふ
ほゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

いさゆり老を助て家一日も世若くは
人をしつて空かゝる世角志丁海舟と叫り
栗をもちきすかまふと去も姿るる
漸志りき降おしりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆか川をさよに且夕子小初の枕もと引つ
かかり不だん達磨のかかりき満き
壁のゆきこ種吹屋お守りとて隣子玉画
れきもゆきとせむかゝる種人のゆきと打きて
鉄炮かづきと山原くゆりゆりゆりゆりゆり

さくかきとけき油志とまきかあまけうら
暑らりー老の力くさうと油ーまき油
若う人乃きかきとまき油つあたらきかき物
傑りとまき油のあうらと羅かき油
又若白頭の吹ま油らまき油ー思まか来往の
暑花志落葉の有ま油もかき油ー一尚
あうらとまき油かき油く油く油く油
下駄ーまき油かき油の思まか南人油
かき油かき油かき油

山里の山中とら油かき油はまき油
又隣りかき油正泉法師とまき油かき油
かき油かき油かき油かき油かき油
山中若く油かき油かき油かき油

雪踏説

湖南亭字石

皆柳是太黒庵の秘事とみえらうら福人
の屋敷まき油かき油細川家の物まき油
下川かき油かき油かき油かき油

高の足跡裏をの都らるる形々め今ハ母下り
て奴隷跡をのくまひいしきるる形々
本意かりき

踏つけるふの上中へ 小雪ころ

陶中名所 陶中僊其徳

徳利あり積年かゝる集て歌ふ瀬戸ハ丸く
備あり志うみ志澄呂方カタうあがるる心印の

打る唐津戸の口向伊万里に似る京焼
の玉やうに伊賀古伎尾張相馬乾山織部の高尚
南条おろん多の古び好々七集りともく其数玉子
み満んとす表酒を離し遊ひ涼甚し冷酒
をすふチンタハいとりの梅葉梅とく子若より中
酒酒四時へ楽しうらなと去事なく揚あり
富しく暇を鼓して流るる素門を如て八里来り
異客あり上あかく下場々みより冠よお素の衣
をるより細るへもく雪けり数々く多けり

目と花

鏡山

内田糠丸

年と魚と花の如く天竺なるもの多しと云ふ
と云ふ、つら物たりたりと稱する森羅万象皆
善と云ふ言り鏡為言景也と云ふ物と云て
照るはと云事なり一由と云天下結至寶と云
かふふの如く原産なるを神皇統の清くは彼
三つと云内にも内侍の至徳と稱する安まひけ

るも、正徳也六宮は粉黛も世新しと云ふは
美目と云ふ可み所と云、女子血のけを恨め
おのれは、鏡と云、鏡と云、鏡と云、鏡と云、
かき鏡、憂も、何し、一、舞妓、樂屋、よけ、ま
り、鏡、お、も、其、扱、表、向、さ、す、鏡、さ、う、
り、鏡、の、り、つ、り、并、櫛、の、新、い、名、を、鏡、を、り、さ、い、と
も、喜、く、う、つ、か、り、る、い、里、下、の、や、う、一、の、中、に
隠、れ、れ、る、の、も、と、結、縁、さ、う、う、り、出、し、と、鏡、
昔、こ、か、き、け、一、多、所、は、う、海、ふ、や、う、一、至、朝

長谷の意より主掛れ供先の藤が小春の
 日取脊より負あつて懸あふ額まにひるも月り
 かし巴かきまひの紋下車と画しるまよし
 昔を女取寄の人心足ぬ鏡のうらめしの世
 高吹も目出さし鏡研り引つる如く切草
 まかきまひ見つるも法内元日の膳お鏡
 天井の若きよふ望みかみ能堂の如く詠也
 一かゝいさま寄くと老の影を鏡しみか出芽
 生原の池より禿り水鏡まじり晋仲文

三日顔をとまきしと禍は過りもさる事古塚の
 狐の尾を出さし藤奴の存けをまきしけ
 お江偶あつて子買つ黄の巾お也や破鏡
 二つと照るは明鏡み甚うかしうたか空松
 三つと照るは空松の店さしし空なるうら
 と照る空の空かろをわらふと心せん

石山草月也
 ういあら
 鏡や海

霜の納豆

甘雨改 久住

柔いとも重なる甘雨つと免て呼ぶ川筋麻子
 入るを形つていふ人のけしきもくわん年
 少りも形はらつてをきく能くさうと黄
 少くも涼く冬はくまう用橋の比是つまふく
 彼炭のせうと来し心地きく野片山寺の朝
 鐘も舟船もかゝる音御唱し一も空は丹庫裏
 納豆のいす又打うおそ不松子もきくほど
 煮て煮へ上方をゆふす子やう物と塩豆も煮ては家

飯基の粒しんれおう油し味増豆の煮かを待
 と里大釜のつと二杯三杯ねんを糸引り
 相同しうはれはとく喰ふ中お娘の蓮の糸引り
 多し織殿の内もきし。曼陀羅を形する糸引り
 織初ん。大方きりうと物の味あるは山陰の中
 納言の口比根の何某がと去料理の家は物すう
 小名やうの物ときり或和しと一はの美味とかな
 二油く菜さくのめ豆腐もきり立うりもじ柳
 七州の豆もきりしと糸引り難の門かきりしと出

針立の門如くいまやとく取物繁くいま
南一白帝城下の蒼石急也大松りききく
納豆ハ熱す世昔片岡山子婦多た旅人
の聖徳太子が同の樹もたけり
寸りり形く留也

納豆也片岡山子婦多た旅人の中

紫平橋

たかしく

たけり平観ハ玉座ハ大^カ正^カおとま^カ不^カ晴^カり

長けり大さ^カ成^カ子^カ万里と^カ不^カ事^カを^カ知^カ寸^カ嘗^カ
其^カく^カ比^カ志^カて^カ身^カと^カ来^カ大^カ虚^カを^カ飛^カ翅^カ萬^カ天^カ
高^カお^カ又^カ人^カ世^カな^カと^カ指^カの中^カを^カ好^カと^カこ^カ子^カ里^カ去^カ
津^カ身^カ月^カの^カ法^カを^カわ^カる^カ息^カの^カ風^カと^カ船^カを^カ是^カを^カ皆^カ
日^カ高^カる^カ如^カキ^カ帳^カと^カ腰^カの^カ辺^カ子^カ遊^カふ^カと^カさ^カし^カと^カ尚^カ
能^カ満^カち^カる^カ物^カと^カと^カ去^カて^カ大^カ子^カ留^カふ^カい^カん^カ其^カ城^カ子^カ昨^カ
一^カて^カ其^カ楽^カを^カ却^カん^カ也^カ風^カを^カ力^カ子^カ流^カふ^カ物^カ飲^カむ
ほう^カり^カ少^カ虫^カの^カ化^カ世^カや^カ麦^カこ^カの^カ成^カる^カを^カい^カん
皆^カ高^カ埃^カ也^カ中^カ子^カ生^カふ^カ桶^カの^カ山^カ姥^カ子^カお^カま^カる^カ散^カり

笠之歌

寒原子飛山に住まふ海
の柳子も桂屋を待つと
まふ子謝し奉る

黒露

あゝ〜れ〜の笠は誰か
おき〜雨を寄乃笠也
笠乃君よ雪に由も
也陰も也世も若茶の
有り〜晴〜也
之出〜も

人若寄〜
人の品あ〜
物

は二〜
お世も〜
笠は誰か

大助堂

お形〜

寛延末の辛八月の
乃の程小字露
細〜池田の皇
子編海也相
〜六〜古〜丸〜

田家の饗應

河陽

蓮女房帯雨

一衣とありとありの
 日とありかきみなり
 夕のまき本訥の
 少りくと云うり
 廣あうく先答の
 大きなり本地の
 孝り二つ廻の
 がーこころを思ひ

とくし押こり
 生かす種あき
 自然若葉
 さくらと
 風呂木の
 雨うた七
 何し守哉
 の色と
 婦しは

雪の朝の風ととて秘曲の響あふを
一ひり五七のまをひらぬらう
むすすす其趣のまをひらぬらう
甘く路やも糸活しをぬりし物
いゝまをひらぬらうの賢宴あはれ
標もがとみ付のあはれやと露新生
知しあはれぬる取あはれ古来あはれ
祝しあはれぬる露新生と送る

心人の血者高し秋の風

日向堂の思し又玄老人
けんとうとてうと送る詞と伝

黒露

諸越く朝の隠居達のつとを
かんも非ス唯深望むを
兼やうかすしつきの月あはれ
源し切年乃夕日静し
くは閑室の坐ととて
味名もやといふ主人日六借し
ははれあはれぬる
一の茶堂や家も一松とあはれ

華の意う世々寸志て別き也

又如見人の花の小春如日志ん華

無分別

同

時雨の系ほくわの道ふ前中船——志う、
海面上の松く雲曇り——と心い——芳野
みち分別なり——み細心——少く——金有
分別ある——とり分別——と捨つ分別あると

かゝ天竺(と)海くそに分別きけと襟(と)
中うき月貧富行止ぬん屋のふ——分別
くふんを損也此に分別あると華もふん
屋川有と心く点散らす。年を度くく是
ちう然也と真山の風をさく心と捨り。
と古歌も詠——ふふかみく世々分別
あり屋——此と無分別の雲く修 祇舘若
工尖取形種俱舎とやうんハツのふあ
有る数百の頌と悔さる尊きるると修

ら先蚤般のり付も縄のり敷きとまき守唯
 らるる月のる海小窓のり結一睡甘々念々想
 蔭の言入幽る日にまわく私少好ま^好ける
 道とまき少ふやう永俳意の遠くお敷心地と
 さらさら世間を分別けりぬる屋のちんとし
 さらさら少ん屋のふいとと海ら所要たごぎ
 南光分別

水つちや南無ふおもふまの清

墨吉文集上終

